

「紫紺を繫ぐもの」

雪が降る東京。

高校最後の冬のことだ。

新幹線の発車音が、けたたましく鳴った。

明治大学の政治経済学部を受験した帰りである。

実は、受験で上京するのは、これが初めてではない。

早稲田大学のスポーツ科学部を数か月前に受験していたからだ。

私は中学校から陸上ホッケーというスポーツをしており、大学でも続けたかった。

早稲田大学は、チームの色が私に合っているように感じたので、入学を目指していた。

しかし、言い訳になるが、試験2日前に体調を崩してしまい、私は不合格になった。

その後、必死になって受験勉強をして、雪が降る季節に再び上京したのだ。

明治大学以外にも、複数の大学を受験したが、ことごとく不合格だった。

明治大学が、最後の進路であった。

受験では、手ごたえは無かったものの、私の母から「合格」の知らせを聞いた。

なぜ母からかと言うと、私は合格発表の際、陸上ホッケーの高校日本代表としてスペインに遠征に行っていたからである。

マドリードの空港から国際電話で、実家に連絡し、母に結果を聞いたのだ。

私は、嬉しくて飛び上がった。

「伝統の明治でプレーができる！」

同行していた高校の監督に合格を告げると、自分のことのように喜んでくれた。

かたい握手を交わしたその瞬間は、今でも克明に覚えている。

スペインから帰国後、すぐに明治大学陸上ホッケー部の寮に入寮することになった。

明治大学の陸上ホッケー部は、日本一を何度も経験しており、安田善治郎氏（ロンドンオリンピック陸上ホッケー女子日本代表監督）や数々の男子日本代表選手を輩出してきた名門である。

しかし、近年は他校に日本一の座を明け渡している状態だった。

それどころか、関東リーグでの優勝からも遠ざかっていた。

残念ながら、私が1年生で入学した時、プレーする環境が、整っているとは言えなかった。

穴が開き何度も補修したネット、デコボコとし水はけが悪い土のグラウンド。

近年、陸上ホッケーの公式戦は、人工芝のグラウンドで行われることになっていた。

土のグラウンドと人工芝のグラウンドでは、プレーの質が大きく異なるのである。

そんな折、当時監督をされていた藤原先輩から、八幡山に新しい寮と人工芝グラウンドを作るという話を聞いた。

「夢の人工芝グラウンドである。」

そして私が3年生になるとき、新しい寮と人工芝グラウンドが竣工された。

八幡山のスポーツ施設には、サッカー部やアメリカンフットボール部のグラウンドもあったが、最初から人工芝グラウンドにさせていただいたのは、陸上ホッケー部とラグビー部だけであった。

これは飯田橋で呉服屋を営んでおられた故福山先輩を筆頭に、諸先輩方が大学側に働きかけてくれたからこそであった。

私たちは、練習に明け暮れた。

4年生になったときには、私はチームの主将となった。

ユニフォームもOBの皆様に、伝統の紫紺に新調していただいた。

環境が整い公式戦を意識したトレーニングを行えるようになっていった。

その結果、関東リーグで9年ぶりに優勝を果たすことができた。

これも、諸先輩方のご指導、ご鞭撻があったからである。

お恥ずかしい話、当時はこういった諸先輩方のご指導の有難みが本質的にはわかっていたが、今だからこそその有難みがはっきりとわかる。

優勝後、監督を退かれ、北海道に帰られていた藤原先輩から、明治大学陸上ホッケー部のロゴ入りTシャツを部員皆にプレゼントしていただいた。

諸先輩方のお心遣いは、身に染みるものがあった。

私が卒業してから8年が経とうとしている。

今の後輩たちの活躍は、定期的に便りで拝見している。

これからも諸先輩方からいただいた「明治魂」を引き継いで、紫紺をつないでいってほしい。